

[基礎経済科学研究所第38回研究大会分科会報告]

電機産業における製造請負の実態を映像から視る

—再見聞：NHKスペシャル「フリーター漂流—モノづくりの現場で」2005年—

高田好章（所員）

[報告要旨]

2005年2月5日に放送されたNHKスペシャル「フリーター漂流—モノづくりの現場で」は、その前年の2004年3月7日に放送されたNHKスペシャル「フリーター417万人の衝撃」に続くものである。この「フリーター417万人の衝撃」は、当時世の中に大きな衝撃を与えた。それに続く当番組は、前作品に比べればそれほど大きな衝撃ではなかったが、製造派遣・製造請負を研究しているものには、製造請負の実態を赤裸々に映像によって示されている、という意味でとても重要な作品である。

これまで報告者は、製造現場における請負労働・派遣労働の実態を調べてきた。製造現場での派遣労働が2004年に解禁される以前は、電機産業を筆頭に大企業を含め、多くの企業で企業内請負として請負労働者がすでに働いていた。その実質は派遣労働と変わらないものである。報告者は、その一端を昨年（2014年）9月の基礎研究大会において「電機産業における製造請負・派遣の実態調査について—電機総研2001年&2010年調査—」として報告した。このNHKの番組は、昨年の報告で対象に取り上げた電機連合報告書の調査当時の状況を、映像という形で電機産業における製造請負の実態を我々に示してくれている。

この番組には、電子機器メーカーで中堅企業の栃木県のアローテック、製造請負で全国展開してきた請負大手の日研総業が取り上げられている。番組制作を担当したNHKディレクターが書いた本（松宮健一『フリーター漂流』旬報社2006年）によると、番組の制作にあたり多くの企業から断られ、ようやくこの企業が引き受けてくれて制作が可能になったということである。放送された翌年の2006年夏には、新聞紙上で多くの企業、それも電機産業の大企業における「偽装請負」が報じられ、その後大きな社会問題になった。それを考えれば、この番組の制作は間一髪で可能となったものであり、おそらくこれ以降は、メーカーも請負会社も撮影を許可する可能性はなくなった。「偽装請負」問題発覚後は不可能という点でも貴重な映像であり、現場検証としてとても優れたもので希少価値がある。当報告では、報告者が10年前にこの番組を録画したビデオテープに残された映像をもう一度見直し、この番組から製造請負・製造派遣の問題点を示すことにしたい。

なお、このNHKスペシャル番組は、「フリーター」（番組ではすべて「フリーター」と呼んでいるが、用語に違和感があり、本報告では「請負労働者」と呼ぶ。その実態は「偽装請負労働者」である）という若者の生活や仕事の実態を描くことに主眼が置かれている。そのため、ここに出てくる3名の若者（35歳の人もあるが）自身の生活や彼らの家族との関係や話し合い、また仕事での個人的トラブルや寮生活、病気など、個人的なことが多く描かれている。しかし、本報告では、このような個人的な場面は割愛する。メーカーである製造会社と請負会社との請負という形をとった関係の実態、請負会社そのものの実態、そこで働く請負労働者の労働現場の実態が、どのように映像という形で、どのように画面に描かれているかを、報告で実際の場面を映写し、製造請負・製造派遣の問題に対する問題提起とする。

報告で取り上げる番組の映像場面とその論点は以下のとおりである：

- 1) プロローグ：電子産業と手作業、人間ロボット・人の取り替え自由
- 2) 請負会社の入社テスト：学歴や経験は問われない、手の器用さのみ

- 3) すぐ決まる請負会社採用：やる気と健康であれば、明日からでも
- 4) 請負会社のコールセンター：全国から電話殺到、毎月6千人採用、全国1200社へ
- 5) 請負会社の役割とは：請負会社部長の弁、雇用調節弁で社会に貢献
- 6) 製造請負は派遣と違う：人材を派遣ではなく、仕事を請負う形
- 7) 製造作業風景：請負労働者による携帯電話組み立て、長時間の手作業、コストダウン
- 8) メーカー社長の話：請負労働者で十分、人員を仕事に対応して操作できる
- 9) メーカー担当者から仕事移動の指示：請負会社は急な仕事の移動も拒まずすぐ対応
- 10) 請負会社のコマーシャル撮影：請負会社はどのように人を集めるか
- 11) タマを送る請負会社：部長、率直な言葉で本質を語る、請負労働者は使い捨てのタマ
- 12) 製造現場への請負・派遣の急増：請負社員100万人を超える、単純作業の訓練
- 13) ラインリーダー簡単に選出：少しの経験、時給同じ、手当なし、メーカーと折衝
- 14) またまた仕事が変わる：仕事が短期間で変わる、スキルは磨けない、必要もされない
- 15) 電子機器に筆の手作業：どんなに自動化されても手作業はなくなる
- 16) 給与は働いた時間のみ：病気したら、残業しなければ、生活できない
- 17) 稼げなければ辞めていく：貴重な戦力でも、仕事を保証できない請負会社
- 18) メーカーのアルバイトへ転身：時給が150円アップ、製造経験者はアルバイトへ
- 19) 請負労働者の年齢制限：35歳、紹介されたのはきつい仕事
- 20) エピローグ：また新しい生活が始まる、全国を漂流する請負労働者

これらの論点から見てくることは、以下の点にある。製造会社であるメーカーは、如何に製造コストを削るか、そのために自ら雇用する人員を減らし、給与の安いアルバイトに製造を任せ、さらに生産変動に対応できるように、請負会社を利用する。そのことで、製造コストを20%も削減できたと述べている。請負会社は、全国から集めた労働者を大量に各地の製造現場に「タマ」として送り込んでいる。請負とはいっても請負会社には生産に関するノウハウは何も必要なく、メーカーの指示に従って人員を配置するだけである。映像から見えるのは、ラインは請負労働者のみが仕事をしているが、メーカーの担当者がラインのそばで常に製品の仕上がりをチェックしている。労働者は仕事を探しに請負会社の採用事務所を訪れる。学歴も経験も問われず、即現場に送り込まれる。毎日毎日、機械の代わりに単純な作業が一日続く。残業をしなければ生活できない給与である。少しの製造経験があれば、同じ時給で手当なしのラインリーダーにされ、責任だけが課される。請負労働者の仕事は単純労働であるうえに、短期間で別の仕事に回される。そのため生産労働者としてのスキルは磨けないし、また必要もされない。このまま仕事を続ければ、昇給もなく、契約期間が終われば、また別の仕事を探すことになる。この番組で取り上げられた札幌の3人の若者は、結局契約期間の半年もたずに、栃木での仕事を辞めてしまった。その後の彼らの姿を番組ディレクターは上述の本で追っている。なお、余談ではあるが、2008年に起こった「秋葉原事件」の当事者が派遣労働者であることで、巷間で様々にとりざたされたが、当事者がいた派遣会社がこの番組に出てくる同じ日研総業であり、派遣先は番組で最後に紹介される愛知県とは違うが、関東の同じような自動車製造会社であることで、何かこの番組が大きな社会事件を予言したのではないかと、改めて驚かされる。

日本の産業のうち、もっとも技術の先端を走っている電機産業の製造現場は、このような請負労働者の存在と彼らの手作業によって支えられ、多くの不安定な請負労働者の労苦の上に成り立っている。そのような姿をこの番組から見て取ることができる。